『世界の日本語教育』10, 2000年6月

人間関係からみた課題解決の会話の連鎖構造

椙本総子*

キーワード: 連鎖構造，課題解決，上下関係，対等関係，関係の実践

要旨

本稿の目的は，組織の中で上下関係のある会話者と対等な立場の会話者の会話を比較し，どのような会話の連鎖構造や言語形式で会話を行うことが会話者の上下・対等関係を示すことに関わるのかを解明することである．本稿では，特に課題解決を導き出すことを目的とする会話を分析の対象にした．

分析から，課題解決の会話の連鎖構造には，指示タイプの命令型と指示仰ぎ型，提案タイプの強制型と自発型の四種があることが明らかになった．さらに，自発型には提案提供要求，提案提供，提案の判定要求，提案の協働作成の四つの方法が観察された．

命令型と強制型が多く，連鎖構造の中で誰がどの位置でどの発話を行うかが固定したタイプの会話は，上下関係が明確に実践されている会話である．同様に，提案が自由に行える自発型が多くても提案発話を行う会話者が固定されていたり，提案の決定に関する力をもつ会話者ともたない会話者がわかれている場合も上下関係が実践されている会話だといえる．それに対して，対等関係が実践されている会話はデータでは，自発型の提案の判定要求や協働作成の方法が頻繁に見られた．そこでは，一人の会話者による明示的な提案の提示が避けられ，皆で提案が作り上げられており，それによって会話者は対等な関係であることを示しているのである．

これまで，人間関係に応じた会話の方法は，待遇に関わりのある文末表現や語彙の選択によって特徴づけられると論じられてきたが，どのような会話の流れで会話を行うかも重要であることを本稿では明らかにした．

1. はじめに

本稿の目的は，組織の中で上下関係がある会話者による会話と，対等な立場の会話者による会話を比較することによって，会話者が上下関係および対等関係を会話の上で相互作用的にどのように実践しているのかを示すことである．本稿では，特に会話者が話し合いにより，ある課題について解決を導き出すことを目的とする会話を対象に分析を行う．

* SUGIMOTO Fusako: 大阪外国語大学大学院言語社会研究科博士後期課程修了．

日本語教育においても談話教育の重要性が提唱されて久しく，会話の流れを重視した教材が多く開発されてきたが，会話の流れが人間関係によってどのように異なるのかまでを考慮に入れた教材はまだない．一般に，下の立場の人が上の人に意見を言う際に，言うべき状況やタイミングを間違えば，いくら丁寧な表現形式を用いていても失礼になることがあるように，会話においてはどのように言うかだけでなく，相手に応じて言ってはいけないことや言うべきこと，言う際にはどんなタイミングで言うのかということも問題となる．しかし，日本語教育の教材では，会話者間の上下や親しさなどの人間関係については，ていねい体と普通体，または敬語といった文末表現のバリエーションや待遇に関係のある語彙の選択に焦点があてられるばかりであった．

そこで，本稿では，課題解決の話し合いにおいて，社会的に上下関係がある会話者と対等な関係の会話者がどのような言語形式を用い，どのような会話の流れで発話をやりとりするかによって，上下・対等であることを会話の上で相互作用的に実践しているのかを分析し，教材作成の基礎研究としたい．

2. 先行研究の問題点と本稿の立場

これまでに会話の流れに注目した研究には，勧誘の会話を扱った Drew (1984)，Davidson (1984)，ザトラウスキー (1993)，提案の会話を分析した柏崎他 (1997)，桑原 (1996) などがあるが，これらはいずれも会話者間の上下や親しさなどの人間関係を捨象した形で会話が分析されている．例えば，待遇表現については会話者の関係ぬきに説明がつけられないのと同様，会話の流れも人間関係によって異なるため，会話者間の関係を捨象した分析では会話の仕組みを解明するのに十分とは言えない．

会話者の関係と会話の流れとの関連を述べた研究には，筆者の知る限りでは三井 (1998) があるのみである．三井 (1998) は依頼 / 応答を対象にし，依頼 / 断りの談話行動と親疎関係[1]との関連を分析している．三井 (1998) によると，会話者間で情報の共有量が少ない疎の場合には，例えば依頼や断りの前置きをするなどによって，依頼 / 断りを行っていることを明示的に示す方法が用いられるという．この明示化の方法は，メッセージがより正しく理解されるという利点がある．他方，会話者同士が親しい間柄で情報に関する共通基盤が確立されている場合には，依頼 / 断りをしていることを非明示的に示す方法，例えば，依頼や断りの事情説明をするだけにとどめ，依頼や断りを行っていることを非明示的に示すなどの方法が選択される．この非明示化の利点は，生じるはずの摩擦を回避できる点と非明示化の選択が互いの関係の親密さの確認になることである．

---

[1] 三井 (1998) の研究では，共有する情報量の大小によって親疎が定義されている．

本稿では，ある課題について解決を導き出すことを目的とする会話を分析対象とし，三井(1998)が会話者の親疎関係と依頼/断りの会話の流れとの関連を述べたように人間関係と談話構造との関わりについて，特に，組織の中の上下や対等という人間関係のファクターと会話の流れについて分析を行い，どのような会話の流れで会話を行うことによって会話者の上下・対等の関係が構築されるのかを解明していきたい．

3. データの分析方法

ここでは会話の流れを分析する上で，重要な分析概念となる連鎖構造(sequence organization)について説明し，ついでデータの説明を行いたい．

3-1. 連鎖構造という概念

会話には行為の連鎖ともいうべきやりとりの連続がある(Schegloff & Sacks 1973; Sacks, Schegloff & Jefferson 1974)．この会話上のやりとりの連続は，連鎖構造と呼ばれるもので，例えば依頼において「Xがありますか」といった依頼先行語句(pre-request)をもつ連鎖には，次に記す(a)〜(c)の三つがある．右の表現例は筆者が加えたものである．

(a)	位置 1:	依頼先行語句	「ペンある?」
	位置 2:	先へ進め	「うん」
	位置 3:	依頼	「貸して」
	位置 4:	承諾	「どうぞ」
(b)	位置 1:	依頼先行語句	「ペンある?」
	位置 2′:	申し出	「貸そうか」
	位置 3′:	申し出の受け入れ	「ありがとう」
(c)	位置 1:	依頼先行語句	「ペンある?」
	位置 4:	明白にされていない依頼への応答	「どうぞ」

(Levinson 1983)

(a)は，依頼と承諾という隣接ペアに先行して依頼先行語句と先へ進めの発話ペアがある構造で，まず依頼をする前にその条件が満たされているかの問いかけを依頼先行語句で行い，それに対して先へ進めの応答が得られた後で，依頼を行い，それを承諾するという連鎖になっている．(b)は，依頼先行語句が発話されただけで相手が依頼であることを察し，次の発話位置で申し出を行い，それに対し依頼者になるはずの会話者が申し出の受け入れを行うという連鎖である．(c)は，依頼先行語句が発話されただけで，相手がそれに対して自ら応答するという連鎖である．(c)の連鎖は，(a)の連鎖構造において二番目と三番目の位置に来る発話が省略された連鎖となっ

ている．依頼の場合，このうちのどの連鎖構造が選択されるかは，依頼内容の相手にかける負担度だけでなく，三井(1998)が指摘しているように会話者間の関係もそれに関わってくると考えられる．このように，一つの談話行動に対し種々の連鎖構造が存在するが，そのいずれが選択されるかは，コンテクストによって使い分けられている．

そこで，本稿では，課題解決を導き出すことを目的とする会話について連鎖のタイプ分けを行い，連鎖タイプと人間関係との関わりを明らかにする．分析は文字化資料を基に，発話の機能の流れから連鎖構造を抽出し，その連鎖構造のタイプ分けをするとともに，連鎖構造の中で用いられている言語形式と連鎖との関連を考察するという方法で行う．さらに，連鎖タイプおよびそこで使用される言語形式が，会話の上で上下であることや対等であることをどのように指標する[2]のか考察する．

3-2. データ

データ1は56分，データ2は300分，データ3は240分で，会話は全てオーディオカセットテープに録音し，それを文字化したものである[3]．

データ1「和食料理店のミーティング」

この会話は，和食料理店のミーティングで，経費削減の方法，決算期間中の休みの取り方，有給休暇の取り方，そしてメニューについての客の苦情に対する対処法を話し合っている会話である．会話は，1997年8月4日，和食料理店の一室で行われた．会話者は10名で，その仕事上の役割とその他の属性(年齢・性別)は次の通りである．店長(40代前半・男性)，調理主任(30代半ば・男性)，調理師A(50代半ば・男性)，調理師B(40代前半・男性)，調理師C(20代前半・男性)，調理師D(20代前半・男性)，調理師E(20代前半・男性)，ホール主任(50代前半・女性)，ホールアルバイト(20代前半・女性)，洗い場(60代半ば・女性)．

データ2「監修者，編集者，作成者による教科書編集会議」

会話の内容は語学教科書の出版にあたり，その内容を検討するというものである．会話は，1997年7月31日，X大学共同研究室で行われた．会話者は計5名で，教科書作成上の役割とその他の属性(順に，年齢・性別・役職名)は次の通りである．監修者[4](40代後半・男性・X大学の教授)，編集者(30代半ば・女性・出版社の社員)，作成者A(40代前半・女性・X大学の非常勤講師)，作成者B[5](20代後半・女性・X大学の嘱託研究員)，作成者C(20代後半・女性・X大

---

[2] 指標(indexicality)とは，民族言語学(ethnolinguistics)の研究者が用いる用語で，言語が相互作用の社会・文化的な次元を表す作用のことを言う．Ochs(1992)参照．

[3] 男女差も会話の方法の分析には重要な要素であるが，本稿ではこれについては考察しない．

[4] 監修者の出版に際しての実際のタイトルは著者であるが，出版の発起人であり，他の作成者に対して上司にあたること，およびデータ説明の簡便さから監修者という名付けにする．

[5] 作成者Bは筆者自身である．

学の非常勤講師).

データ 3 「作成者のみの教科書編集会議」

この会話は，教科書出版にあたり第1校目の原稿のチェックと教師用マニュアルに載せる文法説明を検討するという内容である．会話は，1997年11月30日，作成者Bの自宅で行われた．会話者は計4名で，作成者A, B, Cはデータ2と同じメンバーで，そこに作成者D(20代後半・女性・Y大学の助手)が加わっている．

4. 課題解決に向けての連鎖の型

課題の解決に向けての連鎖の型には大きく，他の会話者に対して一方的に指示を与えたりある会話者に指示を仰いだりといった「指示タイプ」と，課題解決に結びつく意見を提出するという「提案タイプ」の二つがあった[6]．

4-1. 指示タイプの二種

指示タイプには，ある会話者が他の会話者に対して一方的に課題解決への指示を与える「命令型」とある会話者が他の会話者に指示を求める「指示仰ぎ型」の二つが観察された．

4-1-1. 指示タイプ1——「命令型」

命令型は，知識のある者が知識のない者に対して，または専門家が非専門家に対して，命令や依頼という形で課題解決への指示を一方的に与えるタイプで，命令をする者と命令に従う者という会話上の上下関係が生じる．連鎖構造は以下に示すとおりで，連鎖構造の下には簡略化した表現型を示しておく．

命令型の連鎖構造 知識のある者 / 専門家による指示 →[7] 知識のない者 / 非専門家の承諾

「…するようにお願します」→「はい，わかりました」

4-1-2. 指示タイプ2——「指示仰ぎ型」

指示仰ぎ型は，知識のない者が知識のある者に対して，または非専門家が専門家に対して，課題解決の指示を求め，それに知識のある者 / 専門家が指示を与えるタイプで，指示を与える者と指示を仰ぐ者との間に相互作用における上下関係が生じる．指示を仰ぐ際には，① どうすべきかという指示を全面的に問う場合，② 自分から案を出しその是非を知識のある者 / 専門家にう

---

[6] 連鎖タイプは，会話者や内容が異なれば本稿で提出した以外の型もあると考えられるが，本稿ではデータから抽出できた連鎖構造を対象として議論を進める．

[7] 連鎖構造の□の発話は，一発話ではなく複数の発話で構成される場合もある．

かがう場合がある.

指示仰ぎ型の連鎖構造

① 知識のない者 / 非専門家による指示の伺い → 知識のある者 / 専門家による指示 → 知識のない者 / 非専門家の承諾

「...はどうしたらいいんでしょうか」→「...してください」→「はい，わかりました」

② 知識のない者 / 非専門家による提案是非の問い → 知識のある者 / 専門家による解答 → 知識のない者 / 非専門家の承諾

「...は～でいいですか」→「それでいいですよ」→「はい，わかりました」

4-2. 提案タイプの二種

提案タイプは，会話者が課題解決に向けて提案を出し合いながら，それに同意したり不同意を述べたりして交渉をすすめるタイプであるが，指名によって強制的に提案を要請されたか否かで次の二つがある.

4-2-1. 提案タイプ 1——「強制型」

強制型は，会話者の一人が他の会話者を指名し検討課題に対する提案を求めるタイプで，会の進行役が指名役を担うことになる．進行役は話の方向をコントロールすることができることから，他の会話者に対して会話上，力をもつことになる.

強制型の連鎖構造

進行役による課題設定と指名 → 指名された者による提案 → 進行役による承諾

「...さんは～をどう思いますか」→「...がいいんじゃないかと思います」→「そうですね」

4-2-2. 提案タイプ 2——「自発型」

設定された解決すべき課題に対し，原則的には誰もが自由に提案を述べ，それに他の会話者が同意もしくは不同意するなどして最終決定を下すタイプである.

自発型の連鎖構造

課題設定 → 提案 → 同　意 / 不同意 → (決定求め) → 最終決定

この連鎖構造は上述の三つの連鎖とは異なり，実際の会話ではこのように単純な連鎖にはならない．例えば，不同意の後に再反論が続き妥協がなされ代案が提示される．その代案に対する同意の発話が行われ最終決定に至る，などさらに複雑な連鎖も考えられる．しかし，ここでは上述の三つと比較するために簡略化した連鎖の図式を示しておき，詳しい議論はデータの分析で行うことにする.

本稿では，連鎖タイプのうち命令型，指示仰ぎ型，強制型についてはデータごとの割合を載せ，その解説を行うことにし，主として自発型について詳しい議論を展開したい．

5. データ1の分析

5-1. データ1の連鎖構造の概要

データ1の和食料理店のミーティングの会話では，四つの連鎖構造——指示タイプの命令型と指示仰ぎ型，提案タイプの強制型と自発型——全てが観察された．その回数*と割合(%は小数点以下を四捨五入)は表1のとおりである．

表1 データ1の連鎖タイプ

連鎖のタイプ	回数	割合(%)	補足情報
指示-命令型	11回	33%	店長10回，調理主任1回
指示-仰ぎ型	5回	15%	店長が5回全て解答
提案-強制型	11回	33%	店長が11回全て指名
提案-自発型	6回	18%	店長1回，調理主任1回，ホール主任2回，調理師Aが2回
合 計	33回	100%	

データ1の命令型で他の会話者に行為遂行の指示を与えていたのは，調理主任の1回を除き，全て店長であった．店長が命令し，他の会話者がそれに従うという行為が繰り返されることによって，店長と他の会話者に相互行為上の上下関係が作られていったといえる．また，指示仰ぎ型において指示を与えていたのも全て店長であった．一般に，質問するという行為は，答えを知っている教師が生徒に質問する場合や就職の面接官などその答えを利用できる立場にある者が質問をする場合を除き，自分が知らないことを相手に教えてもらう行為であるため，知らないという低い立場にあることを示す行為になる．データ1の場合，常に質問者は従業員で解答者は店長というように相互作用的な役割が固定されており，このことによって店長と他の会話者の間に会話における上下関係が形成されていったと考えられる．

強制型は，ある会話者が指名によって強制的に提案を要請するもので，提案を要請する者と要請される者という会話上の相互作用における力関係が生じる．データ1は，いずれも「店長による指名→従業員からの提案→提案に対する店長の承諾」という連鎖構造であった．このことか

* 連鎖タイプの回数は，それぞれのデータ全体において当該の連鎖タイプが観察された数を数えたものである．

ら，店長が進行役となり提案を要請することで会話の進行を統制し，さらに従業員から出された提案に対して常に店長が承諾し提案の決定を行うことで，提案の実際上の責任が自分にあることを示していることがわかる．このような連鎖構造は会話における上下関係の実践を指標しているといえる．

5-2. データ1の自発型の特徴

データ1の自発型は計6回と少ない(表1参照)．ここでは，二種類の自発型——① 設定された課題に対し会話者が提案を行う「提案提供」5回，② 会話者の一人がWH疑問文によって他の会話者に提案を求める「提案提供要求」1回——が観察された．

会話例(1)*は提案提供の例である．

会話例(1)　果物が腐っていたという客からの苦情に対する対策として，ホール主任は小さいタッパーに少しずつ入れておくという提案を行っている．

1 店長　とりあえず明日行って来てー，ま何が(0.4)どうなってたかーゆうのを聞いて来ますんでー，
2 調主　はい．お願いします．　↑ **店長が客のところに謝罪に行くことを伝える**
3　(2.5)
4 ホ主　あのねースイカとかねーあのーーフルーツ，もちろんフルーツとかあそこにちょうどいい大きさのタッパーじゃなくてあれがありますよ．なにか入れ物が一四角いその四角の．
5 調主　はいはい．
6 ホ主　わたし昨日こういう一つの箱にこう入れてあげたの．あれに入れてー(0.4)あれいっぱいにしといたほうが，いいんじゃないかなー．この大きいのにするとあのまま出して使いますでしょ***は．(0.5)まスイカこうゆう大きなタッパーに入れると，そのまま出して使うじゃないですか．こうゆう小さいのだったらいくつかずつ入ってるからー，それが切れたらまた違う，この入れ物が出せるでしょ．そのほうがいいんじゃないかなー．スイカは大きいの出すわ，オレンジは大きいの出すわじゃ，それをいちいちしまったら，作業ができないから// 小さいの四角いの，四角いのあるじゃないですか．　← **ホール主任による提案提供**
7 店長　こういう小さいパック***
8 店長　こうあけたらー．
9 ホ主　缶詰．んーーなんかこうゆうのあるじゃない．それ何人前かーずつに出しといてー，ふたして冷蔵庫に入れといたらー// 出しやすいじゃないですか．
10 調主　まやり方はいろいろあるということでまた検討します以上．　↑ **調理主任による打ち切り**

---

* 文字化の表記は次の通りである．//:// の後の発話がすぐ下の発話と同時に発せられたことを示す　(0.6): ポーズの長さ(秒)　?: 上昇イントネーション　.: 下降イントネーション　,: 短い沈黙　~: 笑いながらの発話　小さい字: 相対的に小さい声の発話　大きい字: 相対的に大きい声の発話　***: 聞き取り不可能な発話　{　}: 発話のくわしい意味，音調などの解説．ー: ーの前の音節が長くのばされていることを示す．

(1) では，店長が 1 店長で明日苦情を言ってきた客のところに謝罪に行き，詳しい内容もそこで聞いてくるということを述べた後に，ホール主任が果物を腐らさずに客に出す方法について自発的に提案 (4 ホ主～9 ホ主) を行っている．

次の (2) は，提案提供要求の例である．

会話例 (2)　サランラップの節約の仕方について．

1 店長　それでも (0.4) 節約するゆうてーやっぱり最小限にするゆうてどうゆう形にしたらー．
← 店長の提案提供要求
2 調 A　やっぱ一回，このー，このつけもんでしたら，つけもんに一回かぶせますので，{つけもんは漬け物の意味}
3 店長　それ一回，
4 調 A　つかえーーでなくして，それをいかに二回三回，つこていくよなー，考え方，ま，リードペーパーとかそうゆうのはねー，一回つこたら，ぼ，ぼいですけど，ラップ関係はーー二回三回は使えるんちゃうかな思いますけどねーー (0.8) でしょう．{「つこて」は「使って」の意味}
↑ 調理師 A による提案
5 調主　ラップというのは，わざわざ二重ーー三重にーーせんでええのをー // 一回目できちんとするとかね．
← 調理主任による提案
6 店長　あーええのを．
7　(0.4)
8 調 A　もうメーター考えてー / 使うとか．
← 調理師 A による提案
9 店長　あーー，ちょ，きちんときちんとあてはまるようにね．
↑ 店長による提案決定

(2) は店長の提案要求 (1 店長) に対し，調理師 A および調理主任が提案を行っており (4 調 A，5 調主，8 調 A)，最終的に出された提案に同意することで提案決定を店長が行っている (9 店長)．

(1) (2) で見たように自発型の提案の発話の後には，(1) の調理主任の打ち切りの発話 (10 調主) の 1 回を除き，他 5 回はいずれも店長がその発話をくり返したりあいづちを行うことによってその提案に同意していることを示し，提案の決定を行っていた (例：(2) 9 店長)．最終的な決定を下す発話によってその会話者に提案に対する決定権があることが示されるが，データ 1 ではその発話を常に店長が行うことによって会話上でも上位であることを実践していたといえる．

データ 1 の提案の自発型における提案発話には，(a) 提案の形式：．．．したほうがいいんじゃないかな ((1) 6 ホ主) / ．．．するとか ((2) 5 調主) / ．．．したら (会話例にはないが，店長が節電案として述べた「クーラーももうどっか一カ所だけ入れといたら」という提案) (b) 自問自答形式：．．．ちゃうんかな思いますけどね ((2) 4 調 A)，などがあった．提案の形式では発話を最後まで述べずに言いさしで終わる，例示の「とか」を用いる，「かな」という独り言化の形式を用いるというようにいずれも提案という FTA (face threatening act: Brown & Levinson 1987) を緩和

する方策が講じられている．この方策は会話者の制度的な立場に関わらず用いられていることからも，これは相手の face に対する気づかいの方策であり，会話者の相互行為的な上下関係に関わるものではないといえる[10]．

一方，どのような会話の流れにおいてどの機能の発話を行うかということは上下などの関係を指標することに関わっている．データ1で見たように，常に特定の会話者が上位であることを指標する発話(命令する，指示を与える，など)を行うということはその会話者が当該の会話において上位であることを実践していたことになる．このように，会話における上下関係は気づかいをあらわす言語形式的な手段によるというより，会話の流れに関わっているのである．

5-3. データ1のまとめ

データ1では，命令型と強制型が共に33%と最も多く(表1参照)，店長による命令と他の従業員による服従という関係が明瞭にあらわれている会話タイプだと言える．また，自発型の提案も従業員から出された提案には，店長が同意することによって提案の最終的な決定を常に行っており，このような会話の流れでやりとりが行われることで会話者は上下関係を実践していたと考えられる．

また，友好的な人間関係を保つ手段であると言われるFTA補償行為は，会話者の立場に関わりなく，互いの関係をよくするために用いられる言語的方策であり，例えば組織の中の下位者が，FTA補償のストラテジーを用いているからといって下の立場である振舞いをしていることにはつながらない．むしろ，会話の連鎖構造の中でどの機能の発話をどのような言語形式で述べるかによって，会話において上位であること／下位であることが指標されるのである．

従って，下の立場の者が上位者に対して提案を行う際には，待遇度の高い表現を使ったり提案の押しつけをやわらげる言語形式上の配慮を行うだけでは不十分で，礼儀を欠いているとみなされる可能性がある．当該の話題内容や相手との関係に応じ，連鎖構造においてどのような言語的振舞いをするかも重要である．

6. データ2の分析

6-1. データ2の連鎖構造の概要

データ2の監修者，編集者，作成者による教科書編成会議の会話の連鎖タイプは表2に示すとおりである．データ2では，命令型の指示は監修者と編集者が行っていた．また，指示仰ぎ型の

---

[10] ただし，いわゆる命令形を用いて命令するなどFTA緩和を行わないことは，会話において上位であることを指標することになる．

表 2　データ 2 の連鎖タイプ

連鎖のタイプ	回数	割合(%)	補足情報
指示-命令型	6 回	7%	監修者 2 回，編集者 4 回
指示-仰ぎ型	41 回	44%	監修者の解答 13 回，編集者の解答 28 回
提案-強制型	0 回	0%	
提案-自発型	46 回	49%	監修者 22 回，編集者 20 回，作成者 4 回
合　計	93 回	100%	監修者 37 回，編集者 52 回，作成者 4 回

連鎖構造では，作成者による指示伺いに対して編集者が指示の解答を与えるという連鎖が 28 回と最も多かったが，その連鎖は「作成者の指示伺い → 編集者の指示 → 作成者の承諾」となるのではなく，監修者が編集者の指示にお墨付きを与えるという連鎖構造，すなわち「作成者の指示伺い → 編集者の指示 → 監修者による決定」が，うち 10 回 (36%) 見られた．このような連鎖構造によって，監修者に発話の実際上の責任があることが示される．

6-2.　データ 2 の自発型の特徴

データ 2 では自発型が 49% と最も多かった(表 2 参照)．自発型の提案発話の方法は，「提案提供」(会話例 (3))，「提案の判定要求」(会話例 (4))，「提案の協働作成」(会話例 (5)) があった．その内訳は表 3 の通りである．

表 3　データ 2 の自発型!

自発型	回数	割合(%)	補足情報
提案提供要求	0 回	0%	
提案提供	37 回	80%	監修者 17 回，編集者 18 回，作成者 A と B それぞれ 1 回
提案判定要求	6 回	13%	監修者 3 回，編集者 2 回，作成者 C の 1 回
提案協働作成	3 回	7%	監修者 2 回，作成者 A の 1 回
合　計	46 回	100%	監修者 22 回，編集者 20 回，作成者 4 回

では，まずデータ 2 の自発型で最も多かった提案提供の会話例を見ていく．

会話例 (3)　重要表現に英語で詳しい説明をつけるのか，重要表現の英語訳だけにするのかの議論

1 監　それから文法説明は，文，この文法説明を，に，え――英訳ー，あの――――英語の説明を加えるかどうかというところなんですけど，　← 監修者による課題の設定

2 編　うん．

3 監　ま，これは(0.2)結構それやると一(0.4)時間がかかると，← 監修者による提案に至る根拠の提示
4 編　うん.
5 監　で，まー(0.6)英訳だけっというのであれば，
6　(0.4)
7 編　うん.
8 監　どうかと，思ってるんですけど.　← 監修者による提案

(3)では，監修者が重要表現に詳しい英語での文法説明をつけるかどうかという課題の設定(1監)をし，ついでそれに対する否定的な評価を3監で述べ，5監，8監で解決策を提案している．この連鎖は「課題の設定→提案の根拠→提案述べ」で，課題の設定から提案を述べるまで一気に一人で話を進めており，この展開からは監修者の意図する方向へ話が進められている．提案提供(監修者17回，編集者18回，作成者2回)のうち，問題を設定した会話者が続けて提案までを述べるというケースは監修者12回，編集者2回，作成者0回であった．

また，(3)では提案発話の際に，「思っている」(8監)を用いているが，「個人的な意見を個人的なものとして明示する」(森山 1992: 111)意味をもつ「思う」を用いることで，意見の押しつけが緩和されているのである．提案の際に，ポーズがおかれ，かつ語がひきのばされていること，発話の終わりが小さな声であること，文末のケドによって断言が避けられていることも同様に，提案の押しつけを弱める効果がある．このように，言語形式やパラ言語(声の大きさや速度などの音調的特徴)ではFTA緩和の方策が講じられているが，その連鎖からは監修者が議論の舵取りの役割を果たしていることがわかる．

次の会話例は，提案の判定要求の例である．

会話例(4)　セクションのタイトルの名付けについての議論．ここでは「重要表現」という名前にするのか，それとも「大切な表現」という名前にするのかの議論

1 監　えっと，重要表現ーで(0.5)えっーーーと(3.5)さっきの話では(3.7)これはそれでいいですか?重要表現は重要表現というので.　← 監修者による提案の判定要求
2　(0.8)
3 編　タイトルですか?
4 監　ええ，タイトル.
5 編　ええと，重要表現という//ふうなのと，
6 作B　大切な//表現.
7 作C　表現.
8 監　大切な表現.
9 編　だったん.
10 監　ま，重要表現で//いい.　← 監修者による提案判定要求の解答
11 編　重要表現でいい.
12　うん．ま内容確認なんかでもね，まこのレベルだから(0.5)あのー(0.5)難しいことばでもね，
13 編　うん.

14 監　いい面もあるわけですよ.　← 監修者による根拠述べ
15 編　うん.

監修者は，セクションのタイトルについての課題を「えっと，重要表現ーで」で設定し，すぐにそれに対する提案を述べているが(1監)，この提案を「これはそれでいいですか?」と上昇イントネーションで判定要求の形で行っている．ついで，編集者が提示された課題についての確認(3編～9編)を行った後，監修者は10監で「重要表現でいい」と自ら判定要求の解答を行い，ついでワケダ＋ヨの形式で論理的な根拠があることを示している(寺村 1984: 283)．監修者は提案の是非の判定を他の会話者に求めているが，是非の判定が述べられるより前に自ら提案の根拠を述べ，提案の決定を行うという連鎖構造で話が進められており，ここから監修者が会話の舵取りを強く行っていることがうかがえる．この提案判定要求はデータ2では計6回見られ，うち監修者3回，編集者2回，作成者Cが1回行っていた．

次に，提案の協働作成の例を見てみよう．

会話例(5)　練習問題の設問のタイトルの名付けについて．現状の「接続詞」のままにするのか，「話題を変える接続詞」もしくは「接続詞をそのままいくつか並べる」という方法に変更するのか議論している部分．

1 監　これ，接続詞っていうような格好で出す，んですか?　← 監修者による課題の設定
2 作A　あっ.
3 監　項目.　↓ 編集者による提案に導くコメント
4 編　そうですね．(0.4)話題を変える接続詞とか．(0.6)あるいは // 単語そのものを並べるか.
5 監　あ，話題を変える接続詞.
6　(1.2)
7 監　どうしますか?　← 監修者による提案求め
8　(1.0)
9 監　サテ，ソレデハがありますが.
10 作B　副詞の時って，たぶん副詞ってあいてた.　← 作成者Bによる提案に導くコメント
11 作A　だけ，よね.
12 作B　だけ.
13　(0.8)
14 編　あんまり，こういうふうに並べない方がいいでしょうね.　← 編集者による提案に導くコメント
15 作A　はい.
16 編　他の，他のケースもいろいろ出てくると，
17 監　うん.
18　(1.4)
19 監　じゃ，接続詞って，やっちゃいます?　← 監修者による提案の判定要求
20 編　うん．話題を変える接続詞とか，ですか.　← 編集者による提案
21 監　あじゃあ，話題を変える接続詞ねオッケー.　← 監修者による提案の決定

(5)は，まず監修者が練習問題の設問のタイトルの名付けについて，現状の「接続詞」という

名付けのままにするのかという問題設定をし，次に編集者が4編で「話題を変える接続詞」か「接続詞をそのままいくつか並べる」の二つの案を示唆している．もう一度監修者が7監で皆に案を求めた後，作成者Bは10作Bで副詞の場合は副詞というタイトルにしていたというコメントを行っており，それを受けて監修者は接続詞の場合も接続詞というタイトルにする案の是非を求めている(19監)．これに編集者が20編で「話題を変える接続詞」という案で応答したため，最終的に監修者は「話題を変える接続詞」という提案を提示した(21監)．提案に至るまでには複数の会話者からいくつかの提案や提案に導くコメントが出され，最終的に「じゃあ」というそれまでの話をまとめる談話標識を用いて提案が決定されている．提案の協働作成は，提案が一人の会話者により単独に行われるのではなく会話者の協力によって協働的に成し遂げられているのが特徴である．この提案の協働作成はデータ2では3例あった．

6-3. データ2のまとめ

データ1で多く見られた連鎖の型は命令型と強制型であったのに対し，データ2では指示仰ぎ型と提案の自発型が多い(表2参照)．データ2はデータ1と比べ，提案の自発型が多いことからデータ1よりも意見を述べる自由度が高く，一見上下関係が強く実践されているようには見えない．ところが，自発型で提案発話を行っていた会話者別の割合は監修者48%(22回)，編集者43%(20回)で，実際に提案を行っていたのは監修者と編集者であること，そして提案提供では課題の設定から提案の発話までを一気に一人で述べるという展開を監修者が高頻度で行っていたこと，提案の判定要求や協働作成が少ないことから，会話の上で上下関係の実践が行われていたことがわかる．

データ1とデータ2では連鎖は異なるが，いずれも上下関係の実践が見られる．つまり，会話における上下関係の実践と一口に言っても，話題内容や会話者の関係に応じて多様な方法が存在するのである．

7. データ3の分析

7-1. データ3の連鎖構造の概要

データ3では，命令型，指示仰ぎ型，強制型がなく全て自発型であった．自発型では，表4に見られるように，提案の判定要求と提案の協働作成が多く，会話者の誰かが特定の機能をもつ発話を特に多く行うということはなかった．

表 4　データ 3 の自発型

自発型	回数	割合(%)	補足情報
提案提供要求	3 回	4%	
提案提供	8 回	10%	
提案判定要求	46 回	59%	
提案協働作成	21 回	27%	
合　計	78 回	100%	特定の会話者が多く発話を行うことはない

7-2.　データ 3 の自発型の特徴

ここでは，データ 3 の自発型で多く観察された提案の協働作成と判定要求を会話例で見ていく．会話例 (6) は提案の協働作成の例である．

会話例 (6)　文法説明の用語についての議論．形容詞をどのような記号で書くかを議論している部分．

1 作C　形容詞，どうしよー?　← 作成者 C による課題の設定
2 作D　ADJ って，長いな．〔ADJ は，adjective のこと〕　← 作成者 D の提案に導くコメント
3 作B　うん．
4　(0.6)
5 作A　あーー．
6 作C　これ一文字ずつ使えるじゃないですか?〔名詞は N，動詞は V とローマ字一文字で書けるという意味〕　← 作成者 C の提案に導くコメント
7 作A　うん．
8 作C　A だけやったら，もし A 対 B みたいな文型だったらわかりにくいかなーって思ったり，
9 作B　うーん．イ A も A やしなー．〔イ A は，い形容詞の意味〕　← 作成者 B による同調の意見
10 作A　うん．
11　(1.0)
12 作C　そういうの使ってるとこありますっけ?　← 作成者 C の問いかけ
13　(0.4)
14 作B　カタカナのイー，　← 作成者 B の答え
15 作A　イ形，ふふふ．よくあるのはー，こんなー，〔イ形は，い形容詞の意味〕　← 作成者 A の答え
16 作C　あーー．
17 作B　ナ形．〔ナ形は，な形容詞の意味〕　← 作成者 B の答え
18 作A　ナ形，うーん．
19 作C　それもいいですね．　↓ 作成者 A の提案に導くコメント
20 作A　もう決めてしまったら，わかりやすくていいかもしれないね．これが一番よく見る形っていうか．
21 作D　あーー．
22 作C　そうですねー．
23 作A　さい，その統一するために，A とか書いてもそっちのほうがややこしい，かもしれへんもん

ねー.
24 作C　うん.
25 作C　それわかりやすいけどなーー.　← 作成者Cの同意
26 作B　イ形，ナ形，いいと思う.　← 作成者Bの同意
27 作C　うん．わたしもいいと思う.　← 作成者Cの同意

このように，提案の協働作成では提案に至るまでには複数の会話者からいくつかの提案に導くコメントが出され，会話者皆で協働的に提案が作られている．一人の会話者が提案をあからさまに行わず，皆が意見を小出しにし発話をつないでいき，提案の決定に至ることで会話者間に連帯感が生じるのだと考えられる．また，このようにして皆で作り上げられた提案は不同意が起こりにくい.

(7)は提案の判定要求であるが，これはデータ3の自発型の提案の中で一番多く見られた.

会話例(7)　参照文型を載せる位置を当該の文型の隣に書くのか文法説明の後に書くのかの議論

1 作D　で，参照の位置はどっちになったん?　こうーいう風にするの?　後ろに書くの?　一番下に書くー?　↑ 作成者Dによる課題の設定と提案判定要求(二者択一形式)
2　(0.8)
3 作C　はーー，これってこれがなかったんやー．じゃ，私どっちも書いてた．ふふふ.
4 作B　ふふ．隣に書くのかー，一番下に書くのか//っていうの?
5 作D　うんそうそうそう.
6 作C　うんうん.
7 作C　一番ーー下?　← 作成者Cによる解答(提案判定要求)
8 作B　下に//しよ.　← 作成者Bによる解答
9 作C　下にしよ.　← 作成者Cによる同意
10 作B　前に書いたらさー，もう即見そうやんなー//やはは.
11 作D　ははははは//はは.
12 作C　そうそうそう.
13 作D　めちゃくちゃ，消極的//な意見やな.
14 作C　一番下に，手，手印だけにしよっかー，　← 作成者Cによる提案決定
15　(0.4)
16 作D　ん手印にしてー，　← 作成者Dによる同意
17 作C　うん.

提案の判定要求(計46回)の問いかけは，上述の1作Dのような二者択一の問い(12回)の他に，Yes / No疑問文によるもの(12回)，ネやヨネによる確認・同意要求(11回)，Yes / No疑問文または二者択一の問いかけを行った上でそれに対する自分のコメントを加えるもの(11回)が見られた.

(7)では，作成者Dが課題設定をし，他の会話者に「(参照文型の位置を)後ろに書くの?　一番下に書くー?」と課題に対する判定要求を二者択一の問いかけの形で求め(1作D)，意見を求

められた他の会話者(作成者C)がその問いかけに答えるが，答えた作成者Cも「一番ーー下?」(7作C)と自らの解答をさらに問いかけるという方法をとっている．このように，連続して問いかけを行いながら提案の決定を行う方法が，判定要求の46回のうち11回観察された．問いかけを連続して行うことで会話者が互いの意向を探り合い，意見の調整をはかっているのである．

7-3. データ3のまとめ

データ3では自発型だけが見られ，中でも提案の判定要求が一番多く，ついで提案の協働作成であった(表4参照)．提案の判定要求は，問いかけによって自分の意見を前面に出すというFTAを避け，他の会話者に提案の判定をまかせている．このような方法は，データ3の会話者すべてが行っている．他の会話者に判定をまかせることで自分に力がないことを会話者皆が示し合いつつ会話を進めるこの方法は，皆が同じように力がないことを指標しており，それが対等関係の実践となっている．

提案の協働作成は皆が提案を協働的につくりあげているため，起こりうる不同意を避けることができ連帯感も生まれるという効果がある．同様に，提案の判定要求も，問いかけることで他の会話者の意向をうかがうことができるため，不同意が起こりにくくなる．実際，データ3で自発型の提案に対し不同意が起こった割合は13%であったのに対し，データ2はその約3倍の37%であった[11]．

会話において対等であると考えられる言語行動とは，会話者がいつでも自由な意思で意見を述べることができることで，その際には会話者が提案を出し合うという言語行動がとられるであろう．ところが，データ3では問いかけ(の連続)によって互いに提案を明示的に述べることを避け合ったり，皆で意見を小出しし提案を作りあげたりするという方法がとられていた．この会話の方法は，意見の境界がぼやけ，誰もが同じような意見をもち，しかも誰が言ってもいいという方法である．これは，独立した個人として同等に力を見せ合うことによる対等関係というよりは，会話者が融合・一体化した形での対等関係の実践であると言える[12]．Strauss (1995) は，この融合・一体化による対等関係の相互的実践の現象が，英語や韓国語と比べ日本語母語話者の会話に多く見られることを指摘している．対等関係といってもその関係のあり方は様々で，会話者がそれぞれ独立した形の会話の方法もデータ3のように一体化した形の場合もあり，会話者や会話の目的，状況によって使い分けされていると考えられる．

---

[11] 不同意の詳細は椙本 (1999b) で述べた．

[12] データ3において一体化・融合化した形がとられた要因の可能性としては，会話者皆が親しい間柄であったことが考えられるが，要因の特定には多くのデータが必要である．

8. まとめ

本稿では，課題解決の会話の連鎖構造として，指示タイプの「命令型」「指示仰ぎ型」，提案タイプの「強制型」「自発型」の四種をデータから抽出した．また，自発型には「提案提供要求」「提案提供」「提案の判定要求」「提案の協働作成」の四つの会話の方法が見られた．そして，本稿では，このような異なる会話の連鎖構造や会話の方法のどれが選択されるかによって，会話者の上下や対等といった関係のあり方が指標されることを見た．

データ1では，命令型と強制型が多く，また連鎖構造のどの位置で誰がどの発話行為をするのかが固定化されており，明確な形で上下関係が実践されている．一方，データ2は，指示仰ぎ型と提案の自発型が多い点で，データ1に比べ，一見上下関係が強く実践されているようには見えない．しかし，指示を述べる会話者および自発型の提案提供において提案を述べる会話者が固定化されていることから，会話の上で提案の決定に関する力をもつ会話者ともたない会話者がわかれており，データ1とは異なる方法で上下関係が実践されていることがわかった．

データ3では，提案の自発型のみが観察され，そこでは会話者が問いかけ(の連続)——提案の判定要求——や提案を皆で作り上げること——提案の協働作成——によって，一人の会話者による明示的な提案が避けられ，会話者皆が提案を作り上げることに関わっていた．会話者皆が対等に提案の達成に関わるという相互行為によって，データ3では対等関係が実践されていたわけである．

以上の分析から，会話者の個々の関係に応じた会話の方法は，待遇に関わりのある語彙や表現のバリエーションによってのみ特徴づけられるのではなく，連鎖構造もそれに大きく関わっていることがわかる．

参考文献

柏崎雅世，足立さゆり，福岡理恵子(1997)「インフォーマルな『と』相談における提案の分析」，『日本語教育学』92号，日本語教育学会．

ザトラウスキー，ポリー(1993)『日本語の談話の構造分析』，くろしお出版．

椙本総子(1999a)「会話者の力関係の調整——不同意から同意に至る連鎖を対象にして——」，『日本語・日本文化研究』第9号，大阪外国語大学日本語講座．

————(1999b)『日本語の会話における上下・対等関係の相互的実践』，大阪外国語大学博士論文．

鈴木　睦(1997)「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」，『視点と言語行動』，くろしお出版．

筒井佐代(1999)「卒業論文の相談の会話における社会的な関係と個人的な関係の調整」，『日本語の地平線：吉田彌壽夫先生古稀記念論文集』，くろしお出版．

寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味II』，くろしお出版．

仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』，ひつじ書房．

桑原和子(1996)「日本語の『提案』の談話の構造分析」，『日本女子大学大学院文学研究科紀要』2号．

南不二男(1974)『現代日本語の構造』，大修館書店．

三井久美子(1998)「日本語の依頼におけるストラテジーの相互交渉——フレームの明示化／非明示化との

関わり——」，大阪外国語大学修士論文.
森山卓郎 (1992) 「文末志向動詞『思う』をめぐって——文の意味としての主観性・客観性——」，『日本語学』11巻8号，明治書院.

Brown, P. and S. C. Levinson 1987. *Politeness: Some universals in language usage.* Cambridge University Press.
Davidson, J. 1984. Subsequent versions of invitations, offers, requests, and proposals dealing with potential or actual rejection. J. M. Atkinson and J. Heritage (eds.) *Structures of social action.* 102–128. Cambridge University Press.
Diamond, J. 1996. *Status and power in verbal interaction.* Amsterdam: John Benjamins.
Drew, P. 1984. Speakers' reportings in invitation sequences. J. M. Atkinson and J. Heritage (eds.) *Structures of social action.* 129–151. Cambridge University Press.
Drew, P. and J. Heritage (eds.) 1992. *Talk at work: Interaction in institutional settings.* Cambridge University Press.
Goffman, E. 1961. *Encounters: Two studies in the sociology of interaction.* Bobbs-Merrill.
Gumperz, J. 1982. *Discourse strategies.* Cambridge University Press.
Lakoff, R. 1975. *Language and women's place.* New York: Harper and Row.
Ochs, E. 1992. Indexing gender. In A. Duranti and C. Goodwin (eds.), *Rethinking context.* 335–358. Cambridge University Press.
Sacks, H. 1972. An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology. In D. Sudnow (ed.), *Studies in social interaction*, 31–73. The Free Press.
Sacks, H., E. A. Schegloff and G. Jefferson. 1974. A simplest systematics for the organization of turn-taking in conversation. *Language*, 50.4, 696–735.
Schegloff, E. A. and H. Sacks. 1973. Opening up closing. *Semiotica* 7.4, 289–327.
Schiffrin, D. 1987. *Discourse markers.* Cambridge University Press.
Strauss, S. 1995. Assessment as a window to sociolinguistic research: The case of Japanese, Korean, and (American) English. In: Misato Tokunaga (ed.), *Gengo henyoo ni kansuru taikeiteki kenkyuu oyobi sono nihongokyooikue no ooyoo*, 177–191. Mombushoo Research Report 0044510992.
Tannen, D. 1983. *Conversation style: Analyzing talk among friends.* Norwood, N. J.: Ablex.
Yukawa, S. 1996. Epistemic stance and discursive construction of self in a Japanese conversation. *Toyama Daigaku Jinbun Gakubu Kiyoo*, 25, 1–20. 論説資料保存会編『日本語学論説資料』33第1分冊に再録.